



中村俊定文庫  
文庫 18  
339







中物出銅



一然助左

賦之録と云々 一梅を安くお約束無分別

裁の菅草

成時ハ酒録の多見ナ 解之と云ハ

音郎——此琴

撥——と云ハ此考 小の右ナリ

亦破冥ノ尾

破——と云ハ一祝ハ 舊く枕小と云ハ

信見又本玉

舞多風と一味ナ ありと云

右 丸

生涯只あり此 中ナリ



是物中此六邊ふー  
 兼魚のまふおかく世の甘味  
 行き深ハ彫ー願く是こ此  
 得尔潜り一帖を加し  
 安彫ー六七物を筆心  
 了了を也

雪中菴珠義

漫興

夢太

或ち文法海之く月夜系  
 酒吹きりも梅乃志瑞  
 印~~~~と硯小様の紙深々  
 了市か~~~~皆毛朽~~~~  
 下懸く為此層火若安~~~~こ  
 ま~~~~あ中の夜文~~~~り

織石  
 葛才  
 物雲  
 飲河  
 這手



造り好一石く此言 羞 自来  
 子猫よそく中の因 友 桃鏡  
 度細小日本体乃荷うら 社 長  
 垂示とり何と只版と汁 如 雷  
 細るく好二重と止の抑屋在 夢 旦  
 長縄うの子此形と教ひも 河 石  
 雲よ死す好如繪庭小束のゆく 土  
 枕 俤乃店 成 枕 俤乃押ふ

石風呂の是小車う仕をよひ 寺  
 うハのそりり景候の月 来  
 形びーハ人泊虫の氣とあつ次 雲  
 左近若袖う一病のうねる 長  
 夢の鏡川豆腐の思思いら中 鏡  
 金沙山乃額よ夕 湯 旦  
 拂う好く好と好花若言丸也 雷  
 翁の小籠う使志の何う 太

白鹿  
 ③



浪原より釣うくひまの意を四  
不望とあはれし出帆もよ岐  
来さし小指自正一の指織を  
はまの浦の舟をさくうふい  
片ははしそくさくさくさくさく  
馬来よ冬のさきういさく  
来さし小指自正一の指織を  
夏の舟を此枕うあく

河石手来雲長鏡

石風呂のき小車、仕をさく  
うハのそりり曇の月  
形びし人舟虫の氣をさく  
左近若袖より舟のちんちん  
春の鏡川豆腐の思をいらす  
金砂山の顔よア湯  
拂う舟をさくさくさくさく  
舟の小艇より使まの何し

手来雲長鏡旦雷太



浪麻子釣うくひとの色を思  
不望とあはれし出帆も子波  
来さし小指月正一の好意を  
は望海の雲をくくふ  
片ははくそくくくくくく  
思来よ冬のさきういしく  
来さし子波よ惚然んく  
夏の舟も此柳をゆく

河石木手来雲長鏡

山々くゆき持乃のくく  
あふ小田よの月意苗代  
子波子波くく来乃の家来  
り月々毛如く小白髪ゆく  
来乃代乃歌白あはれ毎日何り  
くくのちくくくくく  
さぬくよ一云来乃くく  
傘すく来乃くくく

よ鏡長来雲雷旦石

白

四



道成と見えしは、  
けしき此小僧、  
夕暮の枯葉、  
細々と暮れし、  
菊の如き大の、  
判刃の如き、  
閑伽那の如き、  
月白く、

寺 下 太 河 鏡 来 雲 且

三ノ

道成と見えしは、  
けしき此小僧、  
夕暮の枯葉、  
細々と暮れし、  
菊の如き大の、  
判刃の如き、  
閑伽那の如き、  
月白く、

寺 下 太 河 鏡 来 雲 且



望小至換上着ととり垂し  
序表乃公し月うく心生母  
名月下し抄く玄堂く家くそ  
杖波りくあ付さく無くさくん  
新粟小偏糸信乃核かくそ  
りしそありの尻ふ折の行少く  
松穀乃垣の日清く世味く  
風且美海若此系不終く

来 石 雷 長 鏡 河 来

名

胡葱意くくく味信玉河くそ  
くくく位怒く男今家屋く  
幸出く乃先月く青の若墨  
と海く大續く率かくそ凡  
梅子と新くら子形此清くり  
水乳採くく正己織是く  
つくくま新くあく海く水長く  
笠子好いり飲けりの友是

手 木 且 石 雲 長 雷 河



此五事と此方とと續かゝる  
 百戸を操はぬ西月を以て  
 味乃世成つてはるる先の大橋  
 杖下家系に流るる此宮  
 星ひと何ううらむ四つ言の月  
 長多鹿見と不確うと動し  
 河極下局く此草芝露  
 免此さのりり川也り川

東 手 鏡 雲 木 且 鏡 雷

智恵りりくれよ山くく里くくよ  
 かさくく動く多楯口小口反  
 相合れ居や何やゆき本  
 治あゝもとふ平交あけがの  
 鬼と進はすうかゝる花のま  
 中あやめくまをひびあを

河 来 手 木 雲 長



白滝

蓼太 六句

自来 十句

機石 八句

批鏡 九句

葛才 十句

社長 九句

物雲 十句

如雷 九句

飲河 十句

蓼且 九句

這手 十句

附録瓢中吟

八月此入秋言ひし月不き言

柳村子

去々莫月乃の系は満田川

金波子

名月也救世比意莫志言

舎後

十の夜や言を男信且引く此川

東濟

味此蒸くし言乃くは 蝸牛

楚水

みく 聖也踏妙くはく葛の玉

夷仙

下園乃玉も色あり争秋舟成

吐月



子えうう白う更う紅 旅う非  
石流くん思月暮ありきり蜀魂  
洛外へ出ききやくし麦の株  
ふあううふえううんう新く姿なふ  
八合具帆の望月や及老月  
友板母木の百五深く不き文は  
猶活り屋ま去此白ひや然 月  
踏多紅山海や新水下りみら

物雲  
這子  
飲詞  
自來  
旅人  
友鴉  
白翅  
鷺丸

明月やま〜ま〜一株雲道〜〜〜  
川路やふ〜〜〜房は木の香  
るけ枯や藤乃門とろき〜〜まろ  
浮きれ一口あけびけ子く柳  
梅香乃く流かと細く柳うふ  
禁〜〜ま〜〜ま〜わ〜〜け〜〜  
蝶の香や馬も眠る柳陰  
柳〜〜縁折く伸〜〜る葉搦

芦一  
橋尾  
如雷  
夜光  
柳波  
東亀  
湖涼  
夢子



秋の夕より風がー時曇花

女 吏流

因 五々他々よやそり紫

女 野菊

ぬくぬくはあつと夢路暖有が

東漣

夏草のありがーそり月ひら

有止

油いろ色人色ある谷本橋

帰巷

名月や船々海若抱ら

志水

河麻のくまをありり家二川

溪里

林風の夜ーまくまうそらふ

渡柳

中ふく秋のうさくものよハ好き水

雨烟

伊うまをさうまうさうま山小涼

振鷺

さーさる下あ母前日傘ふ

萱路

夕影のほくや八州のりり馬

斗南

白くよや細くくくく月来り

飛来

海草やあー色人ともり紫

桃鏡

水仙やむとあゆりく紫の流ら道

茂松

山妻月や裾川乃扇ふを

七人 孤絃



乙多如天流と道はとちり至  
 如禮  
 あやふれと去乃り雨やたつと  
 古言  
 望れも乃草ふくふく一葉橘  
 陽馬  
 菊の香も原をふく 葉の南  
 蓼旦  
 信之成浄子一 澄や十云夜  
 素木  
 炭毫や町面の靴くまきるり  
 鳴阜  
 けり乃や糖と井ふ片後  
 睦然  
 菊乃香とまくま味一まき白  
 未蕙

青き神夜杖とちりあーるる  
 荊雨  
 道一ゆ〜波〜水面や長本立  
 陽浴  
 下珍成過〜と付やた〜む〜る  
 東里  
 夕霧乃ちりとあ〜ま〜う〜  
 貴石  
 径白くま〜る〜河京葉雲首  
 吳江  
 面乞や井木の極去去 深  
 三楚  
 城〜く〜本成〜く〜ふ〜ま〜の〜  
 花明  
 今〜く〜り〜人〜と〜あ〜ふ〜る〜  
 史韻



沓陸乃下り人かゝりの市 器水  
 川波止押合小糸やこゝ若布 寸松  
 雲風やほよ翻然月むしり 珠英  
 風乃淡見玉をあり蓮のふ 輕素  
 情直にちよ雲涼し山さく 禾城  
 そくふと上雲の何れ流りぬ 馬三  
 山さよの是も唐や不しむす 五全  
 町中ノ草下ノ徒をねそふ 雪燈

ひしう花のり夜や白き子 竹曙  
 めきやゆきしり乃右伶馬 柴立  
 新月やゆきし珠珠の影 半扇  
 春中やふしよのしり道次 蒼上  
 青むしり蛇影し妙影雲の式 六渡  
 瑞雪水の上をけり日やちふ場 春宇  
 雪さくききふふふふふふふ 呂風  
 名月や又捺下しり 梶 吏院



くらげ成りやの送日草小並 桂舎  
 明月や蛸すねかゝ夜更も草 潜夫  
 白露此柳よまゝ一後の月 蚊牙  
 蛸子母草乃中うりや花を風 臺吹  
 水多しわくく波のまみれ 吐雲  
 風日系はひくくくやゆりむ 竹以  
 秋風や石山ひとり月乃霜 春帳  
 名月や芦若く此れあまき 羽人

夜とうね頷城もみ紫をの梅 素紅  
 杖をくく八幡宗若駈く架 莫測  
 草花実のうりまゝくく帰ふ 燕舎  
 梅川の星小町ゆきいあを式 砥川  
 幕目の糸川くくくくく人の月 路上  
 故屋とちねうくく世のまや少夜歌 御風  
 草やら白月の夜半の夜 柳花  
 床の夢尾上此風をよりり危 山紫

白巻  
 目



ひらき記上の秋夜もあり萩の玉  
名月や川瀬の浪を橋を引  
夜花乃鳴笛——さねしね式  
卯此花を八日とさすや言はふ  
く月君ハ留さく言はすや水家さ  
鶴形やさねふをうぶおとくも  
望のまねあさるふが——さねくも  
の月やさす——ふび——の相さる

芦風  
真中  
花汐  
歩月  
鶯息  
麻斤  
燕波  
大燕

夕くれ乃あり——もありく東山さ  
藤籠の藤——利——の月  
時句——と花ありくハ小長く昨  
白を旅——西あやとりて花子のま  
あ月多や物藤の藤を修小舟  
一歩完ふあらけ海やさく——得  
腹日乃さく此まきや百合の巻  
ま——とえ——その几さあり相湯

白鵝  
古江  
百取  
五調  
鶴之  
丸水  
白牛  
機石

白鵝



荒〜〜舟首本を木下言

茶来

経夜や月を心田小画くかく

山這

玉燈やひとみ形去り指一付

鳥橋

河〜ひよりひ皆あ〜〜家故をり

画江

鳴の葉や草よ風持成る可也

刹挂

燈をきけ指小何りてはる可

素詠

原乃至よ必減ゆ〜〜海月式

如測

泉水且波の音何ぞ牡丹畑

樂輪

と〜〜と樹つりあゆみ夕屋うか

桃舟

かよふ且死〜〜文くれ〜〜圓道り家

馬墓

仲乃至〜〜あきさう寸そく非

薫書

笑ハ此帯且張し〜〜不〜〜家式

田並

形よ青〜〜下病や苕浦酒

柳眉

夕〜〜舟乃花と緑の〜〜先〜〜系

路平

面〜〜此の山心〜〜さ〜〜舟長〜〜る〜〜如

如帆

長橋の氷はあ〜〜と〜〜や〜〜〜〜

千婦



柳平此綿よりよきより合飲のふ

香鳥

い月しく乃夏忘却るる川

女雪菜

片皮やま田より風を清く云

女此紅

秋之月返るる年日月而

風跡

夏菊や露をまはすて雲に

百川

白ふくま梅乃枝乃水空く糸

残馬

晴を霞よりありて樹の中

河島

姑小ゆりありて田植うか

李冠

夏菊如くは八日乃茶作堂

麻三

梅も如くは清く予や三條の如

萬千

涼しくは梅より清くぬるの如

梧桐

名も如くは清くや合飲をて夜書

蓼夫

道の多や如くは清く抗所

九丈

酒は清く一色より中より云

茶筵

事通ハ研く清く云く云

羅浮

名も如くは清く云く云

大耳



物さくや草のうらへはもろくふ  
 りまやふりきりし草野川  
 麦林や的もはゆふ小山伏  
 理火や傾城ゆくり文くり  
 龜山よ所多石山此月見ふ  
 雲流きよのくはんくすまきさる  
 春物や月乃多しりも日のありと

又社長  
 梅勤  
 嵐亭  
 人左  
 葛木  
 班象  
 夢太

### 雪中菴下俳書目録

白滝百員

機石集

素堂宗長菴詠并故人問訊之句

蜀川夜話 全 葛木撰

宗祇二十五禁俳諧詔續篇

髭箆

夢太述 梅勤校

古今婦女句拾

うなとみ 全 野菊女撰

芭蕉句解

全

俳諧詩三物

近刻

落柿舎去來湖東問答 全



寶曆七丁丑八月

書肆 江戶通油町  
須原屋太兵衛

Handwritten mark or signature at the bottom left of the left page.



